

只見短歌会 令和五年七月詠草

畑すみに灰のかに匂ふ青紫蘇をつみ来て夕餉げの一品に添へ
馬場 八智

世話受けし知人友人心しつ思ひ至らず月日過ぎゆく
関谷登美子

幼さの残る曾孫業立ち行く祝い言葉の裏は淋しき
目黒 富子

昼寝する息子の頭をそつと撫で夏を感じる頭髮の湿り
立花 奏音

断捨離と言へども亡母ははの短歌うたの道語りし書物捨てるに難し
新国由紀子

締め切りの迫りし歌稿うたの推敲にペンを持てども進まずにをり
渡部ヨリ子

雨風晴とひと日のうちに定まらぬ気候など言ひ友と長居す
故 新国 洋子(遺作)

只見俳句会 七月定例会

真夏日や辛き煎餅届きたる
初夏の風鍋の焦げ付き落とす妻
修 一
無任寺の官修墓地やねむの花
家七戸三戸廃屋濃紫陽花
恒 夫

夏深かし孫を連れての墓参り
秋暑し十三回忌の藤圭子
信
雲足の夏山に影落としつつ
大ききの違うハンカチハンガーに
礼

泥んこのユニホーム姿梅雨に入る
春眠や忘れ漢字の多きこと
都
主なくしあやめの朽ちの早まりぬ
墓石の隙間より十薬顔を出し
一穂

芍薬の一輪咲いて夏来たり
何千の花びら重ね芍薬や
真理子

五月雨の田に落ちる音耳澄まし
柏餅ことにあんこにふんわりと
紺 青